

ジャズ追想記 1

「フランス映画」

2011年11月24日 松本不二男

2010年7月に、あのジャズ月刊誌「スウィング・ジャーナル（S J）」が休刊となってしまった。日本のジャズ・ファンの情報流通の頂点に立ち、編集長児玉紀芳氏が全人生を捧げてジャズのPRと普及に貢献してきたものである。書店の音楽雑誌コーナーを見回るたびにいつも淋しくなる。

僕のジャズへの興味は、クラシック鑑賞のサイド・ワークで始まった。それも、浮気するとか、「ジャズとは何か？」という我がままな疑問をはらすために聴き出したというのが正直なところである。そのナビゲーターがS J誌だったのだ。

そんな片手間ファンとして、ジャズを語るにはしのびない気はするけれども、余りにもジャズに対して忘れがたく知らず知らずのうちに迷い込んだ時代が懐かしく、S J誌が消えてしまったことへの寂寞とした想いもあって、何かを書きたくて仕方ない。だから、言い逃れもできるように適当なつまみ食いでの追想と題し、筋金入りのジャズ愛好家へ敬意を表すべきとも考えた。ただし、40年以上のリスニング経歴はあるから、恥ずかしくなるような拙劣さはないと思う。

その始めは、アート・ブレーキー&ジャズ・メッセンジャーズの

101 危険な関係 “Les Liaisons Dangereuses”(1958年)

102 殺られる “Des Femmes Disparaissent-Les Tricheurs”(1959年)

であった。いずれも、学生時代（1966年～）、大泉の学生寮における同僚のI君から無理気味に誘われて聴いたもので、50年代のフランス映画の背景音楽として作られたものだったが、タバコの靄とグレーな香り、そして鋭いリズムの印象がいつまでも消えなかった。

「危険な関係」では、凄まじいテナーの轟音に圧倒された。同名のフランス映画のメインテーマであるが、中身は観てなくとも許されざる関係のハラハラをかなぐり捨ててのような感じがした。なげやりの刹那さも匂ってくる。ブレーキーの鋭敏なセンスがあふれている。

次の「殺られる」は、殺し屋に追いつめられて戦慄に震えながら忍び足でひそかに逃げ、それから駆け足になるという修羅場が容易に想像され、画面を見てないのに背筋が凍る。バス・ドラの心臓の鼓動と微かなシンバルで緊張が見事に表現され、写実的でものすごくリアルだ。イグアナみたいにどでかい口を開けて泡吹いてドラムを叩いているブレーキーの風貌からは想像できない緻密な傑作とっていいだろう。

高校時代にみた「太陽がいっぱい：1960年」の地中海の焼きつくような陽光が降り注ぐ中で、永遠の美男子アラン・ドロンと、フランス色香のマリー・ラフォレ。そして、イタリアの映画音楽大家、ニーノ・ロータの切なくてリリカルな主題曲の印象が、逆転してしまった。まさに、Film Noir「フィルム・ノワール：暗い映画」の雰囲気を経験したのだ。

これらを親切、丁寧に I 君が説明してくれたのだが、彼はどうも己^{おのれ}の講釈にも酔っていたようだった。その後、少しでも油断して「これ、いいね。」なんて感想のべたら最後、それから2時間は彼の講談に付き合わねばならなかったのだ。I 君は、クラリネットとアルト・サックスを高校時代に習って地元のクラシック・オーケストラにも参加し、大学生になってからはジャズ・バンドにも飛び入りでのアルバイト経験もあるから、演奏法にも詳しく^{くわ}かった。

数寄^{すき}が過ぎると馬鹿になるほど。馬を指してこれは鹿だと押し付けられるまではいかないけれども、それで夜更かしなんて当たり前だった。出廻^{でが}らしのティー・バッグを盥^{たらいまわ}回しで、ほんとに空腹になっても目頭^{めがしら}が重くたれてきても、絶えることのないおしゃべり。

彼の講義が少し食傷^{しょくしょう}気味になってから、しばらく知らんぷりしていたが、ある日、寮のみんなで行った喫茶店で静かにクラリネットが鳴^ないているような音楽がかかっていた。「松本君、これがマイルス・デイビスの

103 死刑台のエレベーター “Ascenseur Pour l'Échafaud”(1957年)

だよ。わかるかいこの幽霊^{ゆうれい}みたいなペット。いいねー。」始まった。僕も耳を凝^こらして聴き入ったら、何となく恐怖と絶望が感じられた。しまったと思ったが、僕の真剣な反応をみた彼はもう止まらない。楽に2時間の講演会だ。だから喫茶店は儲^{もう}からないと言われていた。いまのコーヒー・ショップの小さな椅子と隣^ふに触れそうな狭いスペースでは考えられないほど、昔は、広いソファだったから、話声^{はなしごえ}も隣を余り気にしないでよかったのである。

なお、I 君はクラシックにも興味があり、僕の部屋に来ては「聴かせて！」とのたまわり、ベートーベンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」をかけたら乗りまくるほど手振り指揮ぶりで、物凄く気に行ったようだった。それから、「アルルの女」はないの? と問われ、仕方なくかけたら、

104 アルルの女第2組曲; 第2曲「間奏曲」

で落ち込んで沈んでしまった。どうしたのであろうか。その直後、第3曲のメヌエットのフルートに独りで乗りまくり、泣きそうになった自分をごまかすように、いつもの彼に戻った。それから数カ月ほど過ぎて、静かな日曜日の昼下がりには彼の部屋からアルトサックスが聞こえてきた。じっと耳を澄ましたら何と、あの間奏曲だったのだ。ビゼーのその曲は、アルトが中心である。クラシックでは珍しく、他にはラベルが使ったぐらいである。かれは高校時代、郡山シンフォニー・オーケストラに参加してクラリネットとアルトを任され、間奏曲では麗^{うるわ}しいアルトを吹いたのだ。その時、関白オヤジに尽くして子供を8人も産んで育てて苦労づくめの母が会場に来て、じっと聴いてくれたのだ。と、あとで話をしてくれた。

さて、マイルスは、数年後に知ったのだが、フランス映画「死刑台のエレベーター」の撮りたての試写を見ながら即興で吹いたそう。全ての場面に対応して、結果26曲も録音したのである。50年代を風靡^{ふうび}していた白人のスウィングに対抗して、ビ・バップを確立したチャーリー・パーカー(“バード”)のバンドに合わないので抜け出したあとだ。マイルスは

ディジー・ガレスピーに代わってバードのメンバーに参加したのだが、ビ・バップの叫喚^{きょうかん}ブロー、張り裂けるような吹き方とアップテンポに自分は適しないと判断した、といわれている。ガレスピーの「途中から折れ曲がってベル（朝顔）が宙を向いたトランペット」は彼のトレードマークであったように、最強音で吹くときには腰をかがめるのでラッパが下を向いてしまうから、ベルが聴衆に向くようにしたかったようだ。マイルスは身長167cmの小男であり、ディジーは180cmを超える大男だったから、肺活量に格段の差があるうえに、ディジーの口唇の筋力は異常に強かったらしい。だから、バードのバンドに入ってマイルスの最初の録音は、マイルスのペットが微かに聴こえるほど。不幸にも、録音セットはディジーのラウドネスを想定してレベル調整されていたのだ。

このような張り裂けるようなラッパ音よりもどちらかといえば、中音域で染み出るようなトランペットの音に開拓の方向を見い出し、マイクはベルに接近するように配慮することにしたようだ。

そして、この劣等意識は1960年代には解消されている。いわゆる黄金クインテット、第1期の主なメンバーが、ジョージ・コールマン：TS、ハービー・ハンコック：P、ロン・カーター：B、トニー・ウィリアムス：Dという凄腕のエースばかりで構成された時期であり、1964年頃には、次のアルバムでドラムスの限界を極めるアップ・テンポと強烈な叫びのペットも聴ける。

104-2 “My Funny Valentine” (1964)

この年に、テナーがああウェイン・ショーターに変わったから、正に金ピカになった。

バードのバンドを抜けてから、名アレンジャーのギル・エヴァンスとのセッションで開眼し、「クール誕生：1949/1950年」を世に送り出した。大きなセンセーションを巻き起こし、^{どうもく}瞠目はじめたフランス映画界が彼を招いて「死刑台のエレベーター」の付帯音楽製作となり、ジャズを世界に向けて発信してくれたのだ。あの「危険な関係」のブレーキーは、この後塵である。

映画音楽を手掛けてから即座に、

105 カインド・オブ・ブルー (Kind of Blue: 1958年)

というアルバムを発表してマイルスの主張「静けさ」を押し出し、一躍、30歳そここの若造がジャズ界のトップに躍り出たのだ。ほんとにブルーだらけであるが、マイルスの諧謔^{かいぎやく}性（ふざけ）もうかがえる。すなわち、

“Miles Tone” は “Mile Stone”（一里塚）であり、

“Miles Smiles” は “Miles!, Miles!” と観客の囃子^{はやし}と区別できず、

“live evil” は鏡面対象、

“Kind of Blue” は “King of Blue” と誤植され易いのだ。

事実、そうなったのだから、しょうもない。

さらに、このアルバムでは「モード奏法」というバンドのメンバー連携に妙味を発揮する

手法を編み出して適用した画期的なものである。曲も絶品と評されてジャズの金字塔となり、これまでに1千万枚以上売り上げたそうだ。これを知ったのは社会人になってからであるが、当時の僕自身はジャズのLPを買って聴くほどじゃなかった。しかも、あのテナーの神様ジョン・コルトレーンがおとなしくサイド・マンをつとめているではないか。この時点までは、まだ神の子だったのかもしれない。

それから、アルバイト先が四谷になって引っ越したため、しつこさが懐かしくなるぐらい、ジャズ先生のI君からしばらく離れていた。その店はスナックで、BGMが何故かジャズだったのだ。不思議な出会いである。芸術の堪能とは、そういう神々のいたずらのような邂逅が積み重ならなければならないものと、今になって感慨深い。

そのこのチーフの好みバラード調だった。ある時、数枚の輸入盤を抱えてきて、それを店のレコードラックに入れてその日からかけた。その中で、ジワッと響いてきたのがマイルスとミルト・ジャクソンの

106 バグス・グルーブ (Bag's Groove: 1954年)

だった。なんというか、静かでリズムカルな抒情をさわやかに感じさせてくれたのである。ジャズでシューベルトを聴けるといっても過言ではないほど。LPのライナー・ノートを読んだら、“Bag”とはMJQ: Modern Jaz Quartetのバイブ奏者であるミルト・ジャクソンのあだ名だったのだ。いわゆる眼の下の膨らみであり、アメリカ人はそれをバッグ(かばん)と呼ぶらしい。ミルトはそれを両眼に垂らしていたからなのだが、グルーブは「楽しみ」という意味もあり、「ミルトの楽しみ(十八番)」と解釈できる。彼のオリジナルであり、あとでMJQの演奏も聴いて、なるほどと肯いた。情感がない“印象派”的なマイルスの静のサウンドが堪能できる名作でもある。あとで聴いた

107 ラウンド・アバウト・ミッドナイト: 'Round About Midnight 1956年

のミュートを付けたペットよりも沁みいる。そう、50年に開眼してから、マイルスは感情を込めるよりも、街の情景とか部屋の光と影、雰囲気と香りを書いてしまうから、悲哀とか慕情とか激情とかを期待すると裏切られることが、30年たってから解った。ドビュッシーみたいだ。だから、フランス映画界に目を付けられたのかもしれない。

たまたま会ったあのI君にこれをPRしたら、「あっそう」だけの返事。たぶん、僕も時々反省しているが、自分の知らない曲には冷たくしたかったのだろう。人は、自分の分野に踏み込んでくる他人の新しい話には素直じゃないのかもしれない。

さて、ジャズとは何か?であるが、いつのまにかI君講義の聴講から始まって、マイルス・トーンに出会い、彼らに引導されてしまった。不思議である。今になって考えると、世界中を照らすマイルス光線は太陽のように永遠に遮ることは出来ないということだ。ジャズとはマイルスなのであろうか。僕の実際は、無知から未知へと、「知らない」から「なんだそれ」へと転換させてくれたのがマイルスであった。